

## Objection

# 教養的英語はどこへ

拝啓 太田恵雄 様

前々号の「ある教育者の夢」に対する反論「学ぶ側から見た英語教育」を前号で拝読いたしました。

『広島大学職員のための英会話集』（第八集「H」の項目以降は、私も重宝させてもらっています）を編まれた実績が、おありだけに、「もつともだ」と思う論点の多い反面、英語のオーラル・コミュニケーションにおける運用能力一辺倒の論に賛成しかねる点があり、筆をとった次第です。この一文が、ご転勤先の京都大学に届くことを願いながら。

一教官氏の言葉「高等言語」教育に憤るあまり、「大学の英語の授業はつまらなかった。英文のテキストをただ順番に日本語に訳していくだけだった」とおっしゃるのは、いかがなものでしょうか。

担当教官に問題があったのか、あなたの側の姿勢に何かあったのか、それとも両方なのか、当事者でない私には置りかねます。がしかし、土井忠生先生や森瀧市郎先生のお口から、高等師範学校や帝国大学での外国語教育がつまらなかったなどは一度も聞いたことがありません。外国人教師はいても、L.L.T.Vなどという機械など存在しなかった時代の教育で。

もつとも、八十歳を超えてなお、学問への興味を青年のごとく抱く明治生まれの方々でしたが。

「L.Lの装置があれば事足り」とするのは、文部省の、有り難くも頑固な偏見で、お陰様で、文学部でのL.L教室を含めて、英文学を専門とする私が三度もL.L教室づくりを体験させていただきました。

L.Lが欲しいと要求すると必ず実現するという魔法があるらしく、実現した機器をただ指をくわえているのもしく、L.Lを使った教育を私もかなり実践してきました。

L.L教育を売りあるものにする教材づくりと授業は、巷の陰口として聞こえてくる「装置のボタンを押すだけで、教師は楽をしている」などの評とはまったく違った、たいへんな作業と労働でした。

当然のことながら、装置だけでは必要十分条件ではないのです。ですから、総合科学部にあって、専門である文学研究を深化・継続されている私と隣組の先生が、コミュニケーション教育に深く携わっておられる姿を見て、頭が下がるばかりです。

他方、一教官氏の「高等言語」なる言葉にも賛成しかねるのです。「思弁的言語」と「日常的言語」という呼称なら、まだ納得できるのですが。「高等」に対して「下等」という対の言葉を

連想させる点が問題なのです。

問題と言えば、「森瀧先生などの時代は終わった」との反論が生じるでしょう。そのとおりです。

今年三月、「学部教育とカリキュラム改革」が本学大学教育研究センターから出ました。有本先生の第一章の鍵言葉は、「大衆化と多様化」だと私は読みました。この本のもつともおもしろい箇所は、補章に収められた学生の私語に関する研究論文です。事態はそこまで進行しているのでしょうか。

高等学校教育が量的・実態的に義務教育化している昨今、大学もそのあとを追っているのでしょうか。そして、そのことが質の形となつて問題の顕在化となるのです。

確かに、学生はコミュニケーションに使える英語を求めています。その習った日常英語で表現したい内在物があるのでしょうか。おおいに疑問です。

どうしても伝えたい事情、必然性、内容、思考、人生観があるなら、道具としての言語は、中・高等学校で習った英語の場合、本人の努力でひとり身に身につく時代になっているのです。道具があつて物が存在するのでなく、言語の場合、伝えたい内容（動機）があつて言語は個人にとって意味を持った存在となるのです。車の両輪のように伝達言語と思弁的言語が軌を一にして進み、B・ラッセルや「ニューズ・ウィーク」の内容を英語で討論できるなら、理想形に近いでしょう。

現実はずうではありません。日本語版のニューズ・ウィークを読んで意見の一つも持たぬ学生が多いのですから。外国の学生との大きな差を感じるのはいそこのです。民族の特性のせいにしてしまいませんか、世界に誇る日本の教育

の成果なのでしょうか。

私は、二年生向けの文学的英語を素材にして読む力を養成する講読なる授業を持っています。受講生は教育学部と文学部生。太田様が読んで訳す授業と言われるものですが、一回に進む量を教週間前に必ず学生に伝え、講義の前にその日進む部分の予習量と理解度をチェックする、ほんの三、四行文の英文を訳してもらおうテストを必ず毎回行うのです。

そのテストは採点をするのでなく、私が教えるための参考として集計し、集計の傾向のみを次週に学生諸君に知らせます。毎回の小テストの用紙には、説明・感想・疑問・意見と書いたスペースを設け、学生の人たちの声を聞く欄をつくって、おもしろいものは次週にできるだけ紹介。すると、季節の挨拶から郷土の自慢等、英語の文章以外のことが実にたくさん出てくるのです。学生が求めているのは、英語でのコミュニケーション以前に日本語で教師とのコミュニケーションを求めている、と私は判断しています。

年度初めは、テキストが難しすぎるとの批判が多いのですが、年度末には、文学的英語の読み方に興味を持つ学生が主となり、この傾向が、特に教育学部生に顕著なのです。読んで訳す授業は、単純に見えても、学問の本質に最も近い作業で、必ず通らねばならぬものと私は信じています。少しの工夫で、その複雑な作業に学生とともに入っていけると主張したいのです。

本当は、「米語」教育を中・高校で行っているのに、「英語」教育と呼ぶのかという問題、入試改善の提言に対する問題点など言い残した部分がたくさんあるのですが、本日は、これにて欄筆させていただきます。

文学部助教授 植木研介（うえき・けんすけ） 敬具